



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

復活第2主日 C年 (2022年4月24日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：使徒言行録 5章12—16節

第二朗読：ヨハネの黙示録 1章9—11a、12—13、17—19節

福音朗読：ヨハネによる福音書 20章19—31節

イエスさまの手

ちょっとひと言

今日は伝統的に「白衣の主日」と呼ばれていました。復活徹夜祭で洗礼を受けた男女は復活をイメージする白い衣を一週間着続けたと言われています。そして、今日、衣を脱ぐにあたって、生きていく上での信じることの大切さをトマスのエピソードから味わったわけです。

さて、今日の福音書を眺めてみると、復活したイエスさまが与えてくださるものがいくつかあることに気づかされます。平和(19節)、遣わす(21節)、聖霊(22節)、赦し(23節)、そして信仰(27節)です。いずれもイエスさまが大切に生きてきたものです。ですから、復活したイエスさまは、ご自分にとって大切なものをすべてお弟子さんたちに分け与えたのです。なぜなら、平和も派遣も聖霊も、ゆるしも、信仰もすべて天の御父からイエスさまはお受け取りになったからです。だから、自分のものとして取っておかない。与えられたものをすべて与え尽くすのです。

とりわけ、聖霊は大切です。新共同訳では明確になっていませんが、十字架上のイエスさまは「霊をお渡しになって」息を引き取ります(ヨハ19章30節 フランシスコ会訳参照)。天の御父からいただいた霊、その霊はイエスさまを導き、励まし、十字架へといざないました。その霊をすべてイエスさまは明け渡して亡くなっていくのです。そして、霊の働きのなかで復活なされたイエスさまは、その大切な霊をお弟子さんたちに与え尽くすのです。

さて、一つのことばに注目しながら今日の福音を詳しく見ていきましょう。それはイエスさまの手です。「あなたがたに平和があるように」と言って復活されたイエスさまはご自分の手と脇腹

を弟子たちにお示しになります。

イエスさまのご生涯を振り返ってみますと手はとても大切な役割を果たしておりました。イエスさまは子供に「手」を置いて祝福し(マタ 19:13)、病人をいやします。また、「手」を差しの伸べて弟子に指示を与え(マタ 12:49)、重い皮膚病をいやし(マタ 8:3)、水に沈みかけたペトロを救い出します(マタ 14:31)。また、イエスさまが「手」を取られて起こされると、ペトロの姑は熱が去り(マコ 1:31)、会堂長の娘はよみがえり(マコ 5:41)、目の不自由な者は見えるようになり(マコ 8:23)、汚れた霊にとりつかれた子供が自由になります(マコ 9:27)。イエスさまがふれた手のぬくもりとはどんなだったのでしょうか。

このように手を通してイエスさまは人々とまじわるのです。同じように父なる神とイエスさまとの交わりも手に基づいています。というのは、イエスさまは十字架上でその霊を御父の「手」にゆだね(ルカ 23:46) 亡くなりました。同時に『ヨハネによる福音書』には「御父は御子を愛して、その手にすべてをゆだねられた」(ヨハ 3:35) とありますから、神はすべてを御子の「手」にゆだねておられるのです。この御父と御子の強い絆に結ばれた交わりに招かれた人々を、誰もイエスさまの「手」から奪い取るものはいないのです(ヨハ 10:28)。

復活したイエスさまの「手」には、人々の罪(神を信じきれない闇)をあがなうために受けた傷がありました。普通、私たちは自分が受けた傷を赤の他人に見せることはしません。ましてやその傷が深ければ深いほど、その傷が信じていた人からの裏切りによってあたえられものであればあるほど、傷を隠します。しかし復活したイエスさまは傷を隠すことはありませんでした。なぜならその傷のついた手こそが愛の証しだったからです。その「手」が示されたとき、トマスは試すことなく、信じる者に変えられました。五感を超えた交わりに気づかされたからです。



「病人たちを癒すキリスト (百グルデン版画)」(部分) レンブラント